鵺

楠山正雄

青空文庫

一

ある時天子さまがたいそう重い不思議な病におかかりになりました。なんでも夜中すぎになると、天子さまのおやすみになる紫宸殿のお屋根の上になんとも知れない気味の悪い声で鳴くものがあります。その声をお聞きになると、天子さまはおひきつけになって、もうそれからは一晩じゅうひどいお熱が出て、おやすみになることができなくなりました。そういうことが三日四日とつづくうち、天子さまのお体は目に見えて弱って、御食事《おしょくじ》もろくろくに召し上がれないし、癇ばかり高ぶって、見るもお気の毒な御容態になりました。

そこで毎晩御所を守る武士が大ぜい、天子さまのおやすみになる御殿の床下に寝ずの番をして、どうかしてこの妖しい鳴き声の正体を見届けようといたしました。

するうちそれは、なんでも毎晩おそくなると、東の方から一むらの真っ黒な雲が湧き出して来て、だんだん紫宸殿のお屋根の上におおいかかります。やがて大きなつめでひつかくような音がすると思うと、はじめ真っ黒な雲と思われていたものが急に恐ろしい化

けものの形になって、大きなつめを恐れ多くも御所のお屋根の上でといでいるのだということがわかりました。

しかしこうして捨てて置けば天子さまのお病はいよいよ重くなって、どんな大事にならないとも限りません。これは一日も早くこの怪しいものを退治して、天子さまのお悩みを鎮めてあげなければならないというので、お公卿さまたちがみんな寄って相談をしました。

なにしろそれにはなに一つし損じのないように、武士の中でも一番弓矢の技のたしかな、心のおちついた人をえらばなければなりません。あれかこれかと考えてみますと、さしあたり源頼政の外に、この大役をしおおせるものがございません。そこで相談がきまって、頼政が呼びだされることになりました。

どうして頼政がそういう名誉を担うようになったかと申しますと、いったいこの頼政は、あの大江山の鬼を退治した頼光には五代めの孫に当たりました。元々武芸の家柄である上に、生まれ付き弓矢の名人で、その上和歌の道にも心得があって、礼儀作法のいやしくない、いわば文武の達人という評判の高い人だったのです。

二

頼政は仰せを承りますと、さっそく鎧胴の上に直垂を着、烏帽子を被って、丁七唱、猪早太という二人の家来をつれて、御所のお庭につめました。唱には雷上動という弓に黒鷲の羽ではいた水破という矢と、山鳥の羽ではいた兵破という矢を持たせました。早太には骨食という短刀を懐に入れてもたせました。

ちょうど五月雨が降ったり止んだりいつもうっとうしい空のころで、夜になるとまっくらで、月も星も見えません。その中であやしい黒い雲がいつどこからわいて来るか、それを見定めるのはなかなかむずかしいことでした。するうち夜中近くなると、いつものとおり東の空からその黒い雲がわいて来たものと見えて、天子さまは、おひきつけになって、おこりをおふるい出しになりました。

頼政は黒い雲が出てきたようだとは思いましたが、一めんにまっくらな空の中で、何が何だかさっぱりわかりません。一生懸命心の中で八幡大神のお名をとなえながら、この一の矢を射損じたら、二の矢をつぐまでもなく生きては帰らない覚悟をきめて、まず水破という鏑矢を取って、弓に番えました。するうちだんだん紫宸殿のお屋根の

上が暗くなって、大きな黒い雲がのしかかって来たことが闇夜にも見分けがつくようになりましたから、ここぞとねらいを定めて、その雲の真ん中めがけて矢を射こみました。やがて鏑矢がぶうんと音を立てて飛んで行きますと、確かに手ごたえがあったらしく、急に雲が乱れはじめて、中から、

「きゃッ、きゃッ。」

と鵺のような鳴き声が聞こえました。

一の矢がうまく行ったので、頼政はすかさず二の矢に兵破という鏑矢を射かけますと、こんども正しく手ごたえがあって、やがてどしんと何か重いものが、屋根の上におちたと思うと、ころころところげて、はるかな空からお庭の上までまっさかさまにおちて来ました。家来の唱が、

「すわこそ。」

と駆け寄って、ばけものを押えますと、早太があずかっていた骨食の短剣を抜いて、ただ一突きにしとめました。

頼政が首尾よくばけものを退治したというので、御殿は上を下への大騒ぎになりました。たいまつをとぼし、ろうそくをつけて正体をよく見ますと、頭はさる、背中は

とら、尾はきつね、足はたぬきという不思議なばけもので、鵺のような鳴き声を出して鳴いたことがわかりました。ばけもののむくろはすぐに焼いて、清水寺のそばの山の上に埋めました。

　鵺が退治られてしまいますと、天子さまのお病はそれなりふきとったように治ってしまいました。天子さまはたいそう頼政の手柄をおほめになって、獅子王というりっぱな剣に、お袍を一重ね添えて、頼政におやりになりました。大臣が剣とお袍を持って、御殿のきざはしの上に立って、頼政にそれを授けようとしました。頼政はきざはしの下にひざをついてそれを頂こうとしました。その時もうそろそろ白みかかってきた大空の上を、ほととぎすが二声三声鳴いて通って行きました。大臣が聞いて、

「ほととぎす
　名をば雲井に
　あぐるかな。」

と歌の上の句を詠みかけますと、

「弓張り月の
　いるにまかせて。」

と、頼政があとをつづけました。

なるほど評判の通り、頼政は武芸の達人であるばかりでなく、和歌の道にも達している、りっぱな武士だと、天子さまはますます感心あそばしました。

三

頼政はその後ずっと天子さまに仕えて、度々の戦にいろいろ手柄をたてました。けれどどういうものか、あまり位が進まないで、いつまでもただの近衛の武士で、昇殿といって、御殿の上に上ることを許されませんでした。それである時、

「人知れぬ
　大内山の
　山守りは
　木がくれてのみ
　月を見るかな。」

という歌を詠みました。そしてせっかく御所に仕えながら低い位に埋もれていて、人に

もしられずにいる山守りが高い山の上の月をわずかに木の間から隙き見するように、天子さまの御殿を仰いでばかり見ているという意味を歌いました。天子さまはその歌をおよみになって、かわいそうにお思いになり、頼政を四位の位にして、御殿に上ることをお許しになりました。

それからまた長い間、四位の位のまますてて置かれていたので、こんどは、

「上るべき
たよりなければ
木のもとに
しいを拾いて
世を渡るかな。」

とうたったので、とうとうまた一つ位がのぼって三位になり、源三位頼政と呼ばれることになりました。

青空文庫情報

底本：「日本の英雄伝説」講談社学術文庫、講談社
1983（昭和58）年6月10日第1刷発行
入力：鈴木厚司
校正：大久保ゆう
2003年9月29日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

鴯

楠山正雄

２０２０年　７月１７日　初版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　http://aozora.xisang.top/
BiliBili　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/